

歴史と道徳を重んじ、地域と家庭の両輪で日本一の人材輩出都市を目指してほしい。

—— 中村学園大学 教育学部 教授 占部 賢志氏



占部 賢志(うらべ けんし)

1950年福岡県生まれ。九州大学大学院人間環境学府博士課程修了。福岡県の公立高校の教諭を経て現職。NPO法人アジア太平洋こども会議イン福岡「世界にはばたく日本のこども大使育成塾」塾長等も務め、教育改革の実践的研究とともに、新たな歴史教育の構築を提唱している。著書に『語り継ぎたい美しい日本人の物語』等がある。

良い方向へ変化できなかつた25年

この25年を振り返ると、時代の節目が1989年にありました。昭和から平成に移り、ベルリンの壁が崩壊するという、世界的な時代の転換点になった年です。教育・文化の面からこの激変を解釈すると、それは即ち「イデオロギー闘争の終結」ということでした。長いイデオロギー闘争は教育現場にも対立の影を落とし、学校は疲弊し、子供もある意味で犠牲者でした。ですから、イデオロギー闘争の終結は、教育現場にとって良い方向に向かう“追い風”になるはずでした。ですが、約20年経って良くなったかといえば、状況はますます悪化しています。

私は、1989年以降の時代認識をきちんと捉え、多重に逼迫する課題をどう解きほぐしていくか、そのからくりを解いていかない限り、力強く的確な教育施策は打てないと考えています。現在の教育施策は、眼前の課題への対応でかなりアップアップしていますから、福岡市がこれから25年という長からず短からずの中長期の視点で、教育を含めた諸々の施策の見直しを進めようとする事は、大変時宜に適っていると思います。

バランスを欠いた対処では成果は挙がらない

今の福岡、そして日本を見ていると、教育に限らず、学校（現場）、地域、国家といったそれぞれのレベルで、これまで行われてきたことの見直しや点検が不十分だと感じます。

例えば、「非行」は福岡県においてこの10年ほど最低水準にあります。大人になっても、飲酒運転をはじめ犯罪は少なくありません。この問題を考える際、数学の不等式で表すと理解しやすいと思いますが、【非行を煽る力>非行を抑止する力】となった時に非行は起こります。この事実、そして状況を見極めている組織が少ないですね。現状は不等式の左側の、非行を煽る要素を抑えることにしか目が向けられておらず、右側の、非行を抑止する力を強化することに関心が持たれていません。

更に具体的に言うと、A市では非行を煽る要素が100、B市では煽る要素が80あるとすると、そこだけを見ればA市の方が非行が起りやすそう、煽る要素を減らすことだけに躍起になる傾向がありますが、非行を抑止する要素がA市では120、B市では50だったとすると、A市は $100 < 120$ で非行は起きにくく、B市は $80 > 50$ で非行が起きやすいのです。バランス

を欠いて、ある面だけ改善しようとしても、もぐら叩きで成果は挙がりません。非行の場合、煽る要素を減らすだけでなく、抑止する要素を強化することも必要不可欠なのです。

また、私は半年ほど前から福岡市に通勤するようになりましたが、本当に驚くのは、自転車の危険運転、マナーの悪さです。福岡市の場合、若い人だけがそういうことをするのではなく老若男女そうで、また、そうした行為を取締っている姿を一度も見たことがありません。もうマナー崩壊というよりも文化崩壊で、肝心な事がなおざりになっている象徴です。これを「自転車の問題」と矮小化してはいけません。交流人口を増やすと言っても、来街者はこうした姿を見て、そこに心が表れているのですから「なんだ、福岡ってこんな都市か」と失望するでしょう。リーダー都市を標榜するならば、マナー、文化の面でもお手本を見せる義務を市民は背負うべきです。ハコが栄えても人がダメな街にならないよう、皆が努力すべきです。

攻めの姿勢で地域や人を作っていこう

先ほどお話した非行の抑止力とは、即ち学校の文化や地域の文化で、これは当然、学校や地域毎の特色があるはずですが、ただ、これも現状の後追いでは守勢になりますから、攻めの姿勢が必要です。言い換えると、学校も地域も国も、諸課題への免疫を持っているはずで、それをどう再構築するか、ということです。

例えば、学校の週五日制は、現場や地域からの自主的な発議、そして休日の過ごし方の受け皿が先にあれば良かったのですが、実際には「まずは週五日制ありき」で話が進み、受け皿対応は後手に回りました。このような状況下で、学校も地域もどう攻めていくのかが、まさに腕の見せ所なのです。

また、別の例として、「住みやすい」地域づくりから一歩攻めて「住みがいのある」地域づ

くりを進めているのが静岡県です。ここは故・草柳大蔵氏を頭に、「意味のある人づくり」を進め、「人づくり百年の計委員会」等がそれを推進しています。今の時代を生きる私たちは、物事を判断する際に、効率性や経済性や合理性といった数値指標に目が行きやすいですし、それはそれで大事なのですが、生きがいのように数値化が困難だけれども重要な指標もあるはずです。先般、国王が来日されたブータン王国で重視されているGNH（=Gross National Happiness、国民総幸福量）という幸福も、数値指標だけでなく、そこで暮らすことの生きがいを指しているのではないのでしょうか。

そうした面での攻めの対応を進める際に、東京のようなメガシティではフットワーク良く動くことは難しいでしょう。その面でも、福岡という都市のサイズはちょうど良いように思います。

地域コミュニティと家族の力がポイント

GNHという概念は、行政の成熟度を測るものさしが多様であることを表しています。福岡市がアジア政策を推進することは基本的に良いのですが、あまりそこだけにフォーカスすぎると、他の文化がおざなりになります。ハコが立派に整備されても、文化が良くない都市は良い都市とは言えないでしょう。そうならないよう、しっかりと見識を持つ人が政策を制御していくことが大事だと思います。

その制御をする上では、やはり「生きがいとは何か」を考えることが根本です。私は生きがいを実現する上で、《地域コミュニティ》と《家族の力》がポイントになると考えます。

その好例なのですが、小学校の全国学力テストのトップは秋田県、そして秋田県内でトップだったのが八峰町です。その秘訣を探ろうと国の内外から視察が訪れるそうですが、町の教育長は「特別のことはしていないが、他の地域と

違う点があるとすれば、(1)児童数の2/3以上が三世同居で、祖父母と孫が親密である。(2)小学校、中学校に勤めている先生たちを、住民が心から尊敬している」と述べています。経験が浅い先生でも、住民が心底尊敬してくれるので、自ずと頑張ろうとするのでしょう。地域が良き先生や良き学校を育て、ひいては良き子供を育てているんですね。つまり、古き良き日本にあった全うな教育の姿が、地域にパッケージとして残っており、これが良い影響を与えているのです。

教育基本法の改正で、子育てにおける第一義の責任者は親であることが明記されました。だからこそ、その親を国や地域が支援していくのだ、ということを忘れてはいけません。「地域で子供を育てる」というと聞こえはいいのですが、安直に考えると、地域が子育てから親を切り離し、また、親も地域に任せて手を抜くことに繋がりがかねません。

頑張る人をきちんと表彰・支援する行政であれ

教育もまちづくりも、住民の知恵出しが必要で、地域をきちんと見つめていけば、地域・住民の側から必ず良くしようとする動きが起きます。それを行政が強力に支援すれば、地域としての文化力になります。逆に言えば、何も起さない地域に行政が支援しても期待薄ですね。

私が考える具体的な支援策は、地域にいる「本当にこの人は立派だ」という人を的確に見抜いた上で、表彰し、支援することです。ずっと地道に頑張っているのに、未だ表彰されないような人が少なからずいらっしゃいますから、変なしがらみに囚われず、頑張る人を表彰・支援する福岡市であってほしいですね。

今の福岡には、公衆道徳を作ろうとする動きが見えません。数値に表れる事柄は重視し、予算も付けますが、自転車マナー問題のような事柄に対してはそうではありません。そうしたこ

れまでおざなりだった面に対して、力がみなぎる福岡市になってほしいですね。

阪神・淡路大震災のとき、日本人がゴミを分別している姿に諸外国は驚き、アメリカはなぜそうなるのか調査団を派遣したのですが、その調査結果は「小学校時代の班別活動に起因する」というものでした。学校で5～6人一班で掃除をしたりしますが、これは諸外国にはない仕組みで、我が国の教育法令上でも実施せよとは明記されていません。しかし、長い歴史の慣習から実態としては行っており、それがイザという時に生きてくるという調査結果だったのです。

班別活動をやっている側、やらせている側、共にそんな目的意識は無かったと思いますが、こうして再評価されたことは重要で、このような例は他にもあるはずですから、これから先も再評価の場が欲しいと私は思います。先ほどの話に戻りますが、教師や地域で頑張る人を表彰し続ける、市を挙げての「教師週間」のような一大イベントに取り組んではどうでしょうか。市民が広く教育に関心を持つことが大切で、家庭・学校・地域が三位一体で取り組めば、“人材排出のまち・福岡”として日本のトップランナーになれると思うのですが。

歴史に学び、アジアに通じる人材の輩出を

公衆道徳同様、福岡は歴史・文化の顕彰がまだまだ不十分です。

19世紀、世界各地で革命が起きましたが、最も成功したのは日本の明治維新です。その成功の鍵を握ったのは薩長同盟で、これは坂本龍馬の業績と捉える人が大多数だと思います。しかし、彼はリレーで言えば第三コーナーを回ってからバトンを受けてゴールしただけで、この構想をスタートから第三コーナーまで引っ張ったのは、福岡藩の月形洗蔵ら筑前勤王派と呼ばれたチームだったのであり、野村望東尼もそ

の支援者の一人です。残念ながら「乙丑の獄」で福岡藩の勤王派が佐幕派に弾圧されたことで、優秀な人材が潰え、明治以降、冷遇されたのです。

こうした誇るべき歴史を地元の人にもよく知ってもらいたいと思いますし、私はこの悲劇を払拭するためにも、人材を輩出するまちになっていくことが、非業の死を遂げた先人に報いることにもなると思うのです。アジアのリーダー都市を目指すならば、そのミッションを担い得る人材を育成することが重要ですし、それが実現すれば、プロジェクトやモノも自ずと福岡に発生したり集ったりするはずで

と見ているよ」と示すことが大切なのです。福岡はそれができるまちだと私は思います。

インタビュー日:2011/11/22 文責:URC 白浜

チャレンジする子供をきちんと見守るまちに

福岡市については「何か手を打てば、なんとかかなりそうなまち」という印象を持っています。

高校生の国際比較で、「あなた個人が社会貢献活動をして、少しは社会が変わると思うか？」との問いに、「ひょっとしたら、自分の参加で変わるかもしれないと思う」と答えた割合が、米・中・韓では約7割に達したのに、日本は約3割に止まりました。社会が少しは変わるかもしれないと感じなければ、社会貢献活動への欲求が生まれないのもある意味当然ですし、そう感じさせてしまう原因の一つには、今の家庭や地域、社会に問題があると言えるでしょう。更には言えば、失敗を経験することなく、ひ弱な子供が増えているのも、こうした考えが子供たちの背景にあるからとも言えるでしょう。

そうした子供たちを増やさないためにも、もしかしたら失敗するかもしれないけれど、動けばなんとかかなりそうだと思うせる雰囲気がある地域にあることは良いことだと思いますし、福岡にはそれがあると思うのです。それこそが文化の力です。そして、そうしたチャレンジをする子どもに対しては、頑張っている姿を「ちゃん